

⑨ 福島県川内村／とりじ商店 箭内義之さん

# いわきの河岸に通う難路で 発揮される軽トラの機動力



軽トラの助手席が箭内義之さんの指定席。仮設住宅への配達に出発

震災による原発事故で避難を余儀なくされた町村のなかで、最初に「帰村宣言」を行った双葉郡川内村。この川内村の村役場の再開翌日に、この地で鮮魚商を再開させた夫妻がいる。長男が戻るまで、夫婦が軽トラで週3日、いわきの河岸に向かう。

毎朝早朝の3時30分に  
妻の運転で河岸へ出発

福島県双葉郡川内村は、県東部の楢葉町、富岡町から山を隔てた、阿武隈山地にある村だ。

県の太平洋側一帯、通称「浜通り」の中核都市であるいわき市までは国道399号を車で小1時間ほど。だが激しいアップダウンと急カーブのある難路で、浜通り側から初めて村を訪れようとする人に対して、地元の人はこの道を勧めず、遠回りだが勾配のゆるやかな迂回ルートを勧めることが多いという。

この山村の住民に長年にわたって新鮮な海の幸を提供してきたのが、村で唯一の鮮魚店であ

川内村を訪ねた昨年秋、周辺は除染作業のただ中。「とりじ商店」にも夕方、作業員数人が来店。「このすじこは大きくて格安。地元じゃこんなの食べられないよ」（関西から来た作業員）と言って、一袋買っていった。

る「とりじ商店」だ。

ここの2代目店主、箭内義之さん(63)はいま、毎週月、水、金曜の早朝3時30分に、商工会から調達した軽トラに乗って妻・敬子さん(63)といわき市にある卸売市場に向かう。

5時、市場着。自分の目利きで2日分に相当する魚を仕入れ、川内村の店へ戻る。通るの

は初心者には勧められないという難路の国道399号。

運転するのは妻の敬子さん。義之さんはつぶやく。

「まさかあちゃんにハンドルを握らせなきゃならなくなるとは思わなかった。軽トラが調達できなければ、あちゃんに運転させることはできないから、店は再開できなかったらう」

## 父親から受け継いだ鮮魚店を 自慢の長男に引き継ぎ 人生の目的はだいたい達成できていた



仮設住宅に住む奥さんたちに囲まれた義之さん

義之さんは糖尿病とパーキンソン病を患っており、車の運転ができない。震災前、いわきにある卸売市場まで仕入に向かうのは、もっぱら義之さんの長男・

崇さん(37)の仕事だった。男ばかり3人兄弟の長男。自慢の息子だ。幼少時から父の魚屋を継ぐことを心に決めていた。

「魚の目利きはできるが、売上の計算とかは苦手で……」という父親のボヤキを聞いて、商業

高校に進学して店舗経営の基礎

を学ぶ。高校卒業後は、義之さん

も修業したい

わきの鮮魚店で

3年修業の後、

家業を手伝う

こととなる。義

之さんが崇さん

と2人で店を切り

り盛りして17年

になる。最初の

10年ほどは父子

で仕入に行っていたが、その後

義之さんは引退

し、仕入れを崇

さんにまかせる

ようになった。

その間に崇さんが「家業はオレが継ぐよ」といつてくれた。

店の経営は実質的に長男がほぼすべてを仕切るようになった。

当初は、鮮魚商稼業の一線から退いた寂しさはあったものの、心の中は安堵感でいっぱいだった。父親から受け継いだ店を3



いわき市の河岸との往復は妻の敬さんが運転。いまではずいぶん慣れた

代目の長男に託すことができた。自分の人生の役割は、おおむね達せられた、と思った。

鮮魚商は朝が早く、夜も遅いきつい仕事である。だから後継者をどう育てるかが、鮮魚商の共通の悩みだ。その点、箭内さんの場合は崇さんが3代目とし



仮設住宅に住む人にとって新鮮な食材を近くで買えるのはありがたい

て定着してくれた。村の人口は3000人足らずで経営は決して甘くはなかったが、それでも自分たちが山を越えて仕入れてくる魚を待つ人は多い。

村で唯一の鮮魚店を息子に継承し、このまま何もなければ、自分は平穏な老後を迎えるはずだった。

だが、東日本大震災が、一家の平穏な暮らしを変えた。

川内村は、原発事故で全住民の避難を余儀なくされた町村のひとつだ。

この村を全国的に有名にした



仕入れた品を店内に運び入れる。夫婦の共同作業だ

のが、昨年1月末に村長が行った「帰村宣言」である。役場機能を移転した県内9町村のなかで初めて、役場を本来の地に戻すと宣言した。4月1日には、元の村役場が業務を開始した。

だが、帰村の足取りは鈍い。全国に散らばった村民のうち戻ったのは震災前の3分の1ほど。

箭内義之さんは、村役場が再開した翌日の2012年4月2日に、以前の場所で「とりじ商店」を再開させた。だが、崇さんは店に戻ってこなかった。

一番の理由は「いまの村の状

況では、鮮魚商の経営だけで一家3人が食べていくのは難しい」という判断だった。

原発から逃れ、一家が1年半あまりの避難生活を過ごした郡山市で、長男は縁あって避難した村民向けの物販の仕事に就いていた。すぐに抜けるわけにはいかない、という事情もあった。

## 商工会に軽トラを借りて妻が握るハンドル

義之さんは敬子さんと2人で再び店を切り盛りすることを決心したが、問題があった。持病を持つ自分に車の運転はできない。しかし、恵子さんが運

転できる仕入用の車がないのだ。震災前に崇さんが仕入で使っていた車は、店にあった1トントラ車だ。敬子さんがこの車のハンドルを握り、この難路を通り、山を越えていわきに通うことは大変危険だった。そこで地元の商工会に相談。貸し出し制度を使って軽トラを調達した。

小回りの効く軽トラであれば、運転に慣れていない敬子さんでも問題がなかった。

朝3時半に出発するという生活は当初はつらかったが、夫婦そろって河岸に向かうのは結婚以来なかったこと。

実は敬子さん自身も川内村に



鮮魚や加工食品など小さくても豊富な品ぞろえ

鮮魚商の娘で、「父親同士がくっつけたようなもの」で義之さんと結婚した。自分も目利きぐらいはある程度できるし、魚をさ

ばくこともできる。

だが、そこは義之さんの目の信頼する。河岸では義之さんの指示を受けてあちこちで買いつけをし、軽トラに運び入れる。帰村後の二人三脚の生活が始まった。

義之さんはいう。



知人が住む家の前に軽トラが乗り付けると、たちまち買い物の人々の輪ができた。「久しぶり」「元気だった?」

「震災のせいで、自分は再び商売の現場に出て、妻まで駆り出すことになってしまった。店の歴史というところで考えると、よくも悪くも大きな節目になりました。でも運搬の手段がなければ、こういう生活すら再開することはできなかった。そう思う



移動販売の手を休めて昔なじみの友人と雑談。話が弾むとつい長居することも

と、軽トラが調達できたことはありがたかったです」  
 住民が激減した村だが、めばらしい食料品店が近隣にないこともあり、再開した昨年4月から比べると、11月時点の売上は2倍近くに増えている。夏場以後、地元で除染作業が行われ、作業員が来店してくれるのも、売上が増えた要因のひとつだ。

幸いなことに、郡山に留まった崇さんは今年春には村に戻って店に入るといつてくれた。もう少しの辛抱だ。

しかし先行きは決して楽観視できない。

何より帰村者が増え、人々が定着しなければ、商売が成り立たない。それは「とりじ商店」という店だけの問題ではなく、

村が村として再興するかどうかという問題でもある。

「息子が戻ってきたら、自分たちは口出ししない。自由にやってくればいいと思います。いまは夫婦2人だけでやっているのをお客さんが知っているから、私ちに遠慮して配達の注文とかが来ない。でも長男が戻れば、そういう注文も増えるだろうから、商売も広がるのではないかと……」  
 村の仮設住宅に住む



仮設住宅に暮らすお客さんも昔からの顔なじみがおおい

顔なじみのお客さんに、軽トラで鮮魚や食料品を販売に行くと、楽しみにしていたという表情で、多くの住民が集まった。

### とにかく一番大事なのは軽トラとかあちゃんだ

妻の敬子さんが、近況が気になるお客さんの家を1軒ずつ訪ねる。近所の住民も加わってすぐに話の輪ができた。

こういう「商売の醍醐味」を再び味わえるだけでも、店を再開してよかった、と思っている。義之さんは河岸通いを崇さん

と行っていたころ、まだ寢床にいる敬子さんの背中を軽く蹴って出ていった。

「行ってくるからな」という、それが夫婦間の合図だった。朝4時起きだった。

いまは敬子さんと3時に起きて河岸に向かう。

「震災がなければ、かあちゃんと河岸にはいかなかった。いまはかあちゃんと軽トラを大事にしちよる。かあちゃんには惚れ直したばい」

1日の仕事を終えて、義之さんはそうつぶやいた。